

批評家としてのヘンリー・ジェイムズ —『ホーソン論』の場合—

後川知美*

Henry James as a Critic —*Hawthorne*—

Tomomi USHIROKAWA

序

『ホーソン論』(*Hawthorne*, 1879) は、イギリスで刊行された作家論集である『イギリス文人評伝双書』(*English Men of Letters Series*) の一つとして発表された。ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) がこのシリーズの執筆依頼を受けたのは、彼がアメリカからイギリスに生活の拠点を移して3年ほどたった頃であった。ジェイムズは当時、フランスやイギリスの作家たちを中心に、アメリカの文芸雑誌で紹介する形で批評活動を行っていたが、それだけでなく、短編小説や長編小説もすでにいくつか発表しており、作家としての地位を築きつつあるところだった。

アメリカよりもヨーロッパで創作活動することを選んだジェイムズであるが、故国の先輩作家であるナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) に対しては、同じアメリカ作家として、特別な感情を抱いていた。そのことは、ジェイムズの青年時代の回想録である『ある少年の覚書』(*Notes of a Son and Brother*, 1914) で、彼がホーソンの訃報を聞いた時の反応によく表れている。

...Hawthorne was dead. What I have called the fusion strikes me as indeed beyond any rendering when I think of the peculiar assault on my private consciousness of that news: I sit once more, half-dressed, late of a summer morning and in a bedimmed light which is somehow at once that of dear

old green American shutters drawn to against openest windows and that of a moral shadow projected as with violence—I sit on my belated bed, I say, and yield to the pang that made me positively and loyally cry. (478)¹

ここには青年であったジェイムズの嘆きと悲しみが静かに綴られており、彼がホーソンに対してどれほどの敬愛の念を抱いていたのか、改めて認識していることがわかる。ホーソン死去の知らせを受けたジェイムズがとった行動は、死を悼み嘆き悲しんだだけではなかった。ジェイムズは、ホーソンが子供向けに書いた作品である『少年少女のためのワンダー・ブック』(*The Wonder-Book for Girls and Boys*, 1852) や『トゥワイストールド・テイルズ』(*Twice-Told Tales*, 1837) に、幼少期から親しんでいたが、それらをも一度読み直したのであった。さらにホーソンの初期の作品から、晩年のロマンスである『大理石の牧神』(*The Marble Faun*, 1860) までを振り返り、改めてその真価に強く魅了されたことを記述している。これらの反応や行動からは、ジェイムズが一読者としてホーソンを敬愛していたことがわかるだけではない。ジェイムズは、ホーソンの死を、彼にとっての歴史的な一大事件と位置づけ、それをきっかけに、ホーソン作品を振り返ることで、自らの作家としての原点をそこに見出し、新たな出発点としようとしていたのだと考えられる。

さらにジェイムズは、『ホーソン論』においてホーソン作品を批評する際に、彼の古いピューリタンな家庭環境についてはもちろん、当時の大統領である彼の級友のフランクリン・ピアス (Franklin Pierce) との友好関係や、ピアスの選挙の宣伝用にホーソンが執筆した彼の伝記が、ピアスの当選を促進したことなどにも言及している。そして、アメリ

(2017年1月6日受理)

* 宇部工業高等専門学校 一般科

カ文学史上におけるホーソンの占める位置について、次のように指摘している。

He is the writer to whom his countrymen most confidently point when they wish to make a claim to have enriched the mother-tongue, and, judging from present appearances, he will long occupy this honorable position. (319) ²

ここでジェイムズは、ホーソンの名声が、将来に渡り安定して続いていくであろうと予見している。それは、ジェイムズが『ホーソン論』を通してホーソンと彼の作品を多角的にとらえたうえでの指摘だと考えられる。そしてホーソンの才能に関する適確な予見ができるジェイムズであったからこそ、『ホーソン論』の執筆には特段の意気込みをもってあつたことが容易に推察されるのである。合計 29 人の作家を対象とした『イギリス文人評伝双書』で取り上げられたアメリカ作家は、ホーソン唯一人であったことも、この作家への思い入れを深めたに違いない。しかしジェイムズは、『ホーソン論』において、ホーソンを数少ないアメリカ作家の貴重な代表として礼賛するだけでなく、厳しい批評の目を向けることにかけても妥協しなかった。当時すでに、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) やハーマン・メルヴィル (Herman Melville)、ジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper) らが、アメリカの国内外で批評の対象になる程度には、アメリカ作家の認知度はあつた。しかしアメリカにおける文藝活動が未発達であることを気にかけていたジェイムズにとっては、同国人の作家が海外で取り上げられるだけでは満足がいかなかったのである。ジェイムズが、イギリスやフランスの小説を自らの小説のモデルとみなしたのはそのためであり、またそうであったからこそ、ジェイムズはアメリカ小説をただ賞賛するだけでなく、厳しい批評家の目とらえることによって、その地位を引き上げていくことに使命を感じていたに違いない。

従って、『ホーソン論』において、ホーソン作品の手法的限界を指摘する時、ジェイムズはこれから彼が担っていくことになる新しいアメリカ小説の方向性を模索していたはずである。そのため、『ホーソン論』には彼自身の文学的野望がかなり盛り込まれている。言い換えると、『ホーソン論』は、批評論であると同時に、ジェイムズ自身の小説観が展開されたジェイムズ的な小説世界の表明でもあるのだ。それは、エミール・ゾラ (Émile Zola) やオノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac) に代表されるようなフランス作家たちのリアリズム小説に刺激を受けていたジェイムズならではの野望であり、それを成し得ることに全力を注いでゆこうとしたのではないだろうか。

そこで本論では、ホーソンへの礼賛と批判が同居する『ホーソン論』において、ジェイムズが注目したホーソンの「地方性」やピューリタニズムと、ジェイムズ自身のリ

アリズム的な小説志向がどのように折り合いを見せていくのかを分析し、ホーソンとの関わりにおけるジェイムズの小説観を明らかにしてゆく。

1. 国際的作家への野望が生み出す揺れ

ジェイムズは、彼の作家活動の初期から晩年にかけて、『ホーソン論』を含んで3篇、ホーソンに関する評論を残した。批評家ピーター・ブイテンハウス (Peter Buitenhuis) は、「ジェイムズが受けたホーソンの影響が、ジェイムズの作家活動の時期を追うごとに様々に変化し、その変化がジェイムズ作品にも反映されている」(207) ³と指摘する。しかし1879年に発表された『ホーソン論』の記述に着目するだけでも、ジェイムズのホーソン評価が一定であるとは言いがたく、その表現を通して、常に変化するジェイムズの様子を窺うことができる。

ジェイムズ作品に見られるホーソン作品の影響を、その小説手法の比較により論ずる先行研究は多くあるが、『ホーソン論』に関しては、この評伝が発表された当時の批評界において、特にアメリカの側から大きな不評を買ったことが良く知られている (2) ⁴。それは、ジェイムズのホーソンに対する評価が、同じアメリカ作家としての立場からというよりは、ヨーロッパ側から眺めたかのような距離感を強く感じさせるような表現によりなされていたためである。ブイテンハウスは、ジェイムズがホーソンの作風や彼の置かれた状況を繰り返し「地方的」(“provincial”)だと述べただけでなく、ポーやソローについても同様の形容をしているところに着目し、ジェイムズが当事のイギリス文壇に気に入られようとした可能性を指摘している (211) ⁵。

また別の先行研究では、批評家マイケル・アネスコ (Michael Anesko) が、フランスにおけるホーソンの受容とジェイムズの関与という観点から『ホーソン論』を分析している。アネスコは、ジェイムズが、フランスの批評家エミール・モンテギュー (Émile Montégut) が書いたホーソン論から、かなりの部分を借用していると言う (37) ⁶。アネスコは、ジェイムズがモンテギューを下敷きにしたというより、ほとんど盗作に近い行為を行っていると主張するが、ここで注目したいのは、盗作が行われたかどうかよりも、ジェイムズが興味を抱いた批評の方法論が、フランス批評にあつた可能性を示唆していることである。

また別の批評家フィリップ・グローバー (Philip Grover) も、その著書においてジェイムズとフランス作家のつながりを指摘するなど、ジェイムズが、フランス小説の形式を手がかりに、彼自身の小説の方向性を模索していたことが知られている⁷。実際、ジェイムズが、彼の著作活動の初期から批評対象にしてきたヨーロッパ作家たちのほとんどが、フランス作家たちであったことは、彼の『文学批評論』(Henry James

Literary Criticism Vol. 2: European Writers, Prefaces to the New York Edition, 1984)にも明らかである。フランス作家たちが先んじて取り入れていた自然主義小説のリアリズム手法に多くを学んだジェイムズからすれば、ホーソーンのロマンスには物足りない面があると感じられるのも、当然のことかもしれない。その傾向は、ジェイムズが『ホーソン論』の執筆にあたり、ラズロップの伝記 (George P. Lathrop, *A Study of Hawthorne*) を下敷きをしているところにも見られる。ジェイムズは、ホーソーンの娘婿であったラズロップの評伝が、身内ならではの愛情深い視点で語られていると評価しながらも、それが「単にアメリカの読者を喜ばせる」(10)ものであったことに不満を抱いている。

ジェイムズは、『ホーソン論』の冒頭部分において、『ホーソン論』の目指すところが「伝記」ではなく「批評論」であるとわざわざ断っている。そしてホーソーンの一生が実に「簡素」なものであったとも記している。つまり、ホーソーンの生涯は伝記として記すにはあまりにも出来事に乏しいことを理由にしながら、ジェイムズ自身の評伝に対する意向ではなく、ホーソーンの生涯そのものに、刺激的な要素が少なかったことを前面に出している。これは別の言い方をすれば、ホーソンがセイレムの社会に密着して慎ましく暮らしたことへの親しみと哀れみでもあり、それが『ホーソン論』における「地方的」という表現にもつながるのではないだろうか。

このように、ホーソーンの作家人生を質素なものだと言い切ってしまうジェイムズの態度が、先述したアメリカ批評界における不評にもつながっているのだろう。しかしジェイムズが、ホーソーンの作家人生に対してこのような表現を用いたのは、不評を恐れて口当たりの良いことを述べるのではなく、またホーソーンの人生の出来事を表面的になぞることでもなく、彼の作家人生と作風に深く切り込んでいながら、アメリカ小説の新しい方向性を模索するという使命感を抱いていたからこそである。そのためジェイムズは、ホーソーンの経歴を麗しく伝えるだけで終わらせるつもりは全くなかったのである。

ジェイムズがこれほど批評論としての『ホーソン論』にこだわりを見せたのは、この頃までに彼がある程度文筆家としての業績を積んでいたことが関係していると思われる。ジェイムズが晩年に自選集『ニューヨーク版』(*The New York Edition*, 1907-09)の冒頭に納めることになる長編小説『ロデリック・ハドソン』(*Roderick Hudson*)は、『ホーソン論』より以前に発表されており、ここでは、後のジェイムズ作品の主要テーマの一つとなる、アメリカ人芸術家の葛藤が扱われている。そこには作品の背景として、ローマに暮らすアメリカ人芸術家たちのコロニーの様子など、ジェイムズの強みである国際的立場が生かされた場面もある。アメリカ人芸術家がヨーロッパで才能を磨く際の困難を描くというテーマだけでなく、主人公を見守る観察者のような人物の視点を導入している点からも、ジェイムズは『ホーソン論』の

時点で、すでに彼独自の世界を持っていたことがわかる。

このことは、この時までにはジェイムズが小説だけでなく、主としてフランス作家たちを対象とした批評論を、『ネイション』(*The Nation*)や『ギャラクシー』(*Galaxy*)のような英米の雑誌を通じて英米の読者に発表していたところにも窺える。この時期のジェイムズの文学観は、彼の生涯の著作姿勢に大きく関わっていることは否めないだろう。

フランス小説に目指す方向性を見出したジェイムズは、1875年の11月から一年以上をパリで暮らす中で、ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert) やエミール・ゾラ、そして同じくフランス滞在中だったイワン・セルゲエヴィチ・ツルゲーネフ (Ivan Sergeyevich Turgenev) らのサロンに出入りし、彼らと交流している。批評家プリシラ・L・ウォルトン (Priscilla L. Walton) は、この時期にジェイムズが目標とした小説手法が、フランス文学理論とヴィクトリア朝小説形式とを融合したものだたと分析している(28)⁸。ジェイムズはフランスに移り住む前までイギリスで生活し、そこでも当時の著名な作家たち、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) やレズリー・スティーブソン (Leslie Stephen)、アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson)、ジョージ・メリディス (George Meredith)、ロバート・ブラウニング (Robert Browning)、ロバート・ルイス・スティーブソン (Robert Louis Stevenson) らと交際している。またウォルトンは、ジェイムズがイギリスの急進派たちが集まるクラブに出入りしていたことにも注目している(29)⁹。若きジェイムズは、イギリスやフランスの文壇だけでなく、上流階級における社交を実際に体験することで、自身の小説手法のヒントや、小説のテーマにつながるものを数多く得たであろう。ジェイムズの小説に、社交界での洗練された会話や、狡猾な駆け引き、時にはだまし合いや腹の探り合いなどがひんぱんに扱われるのは、これらの経験によるところが大きいに違いない。

ジェイムズはこのように、イギリスやフランス自然主義の小説作法を取り入れながら、作家論や作品論、小説や旅行記など幅広い執筆活動を行っていた。また1860年代から70年代にかけて渡欧した際には、数多くのヨーロッパ芸術に触れ、鑑識眼を養い、知識を吸収した。それによりジェイムズは、芸術の表現方法を模索し、作家論や批評論として結実させている。さらにジェイムズは、ヨーロッパでの見聞を旅行記として雑誌に投稿するなど、国際的足場をもとに、文筆業の修行を行っていた。それだけに、1879年の『ホーソン論』はアメリカ作家を世に知らしめる作家論の枠を超えて、ジェイムズの執筆活動の幅を広げるものとなり得たのである。

そして、フランスやイギリス小説における形式美の追求や、リアリズム手法を意識するがゆえに、ジェイムズはホーソン作品におけるそれらの不足を見過ごすことができなかった。ホーソンと彼の作品を「地方的」だとするジェイムズの嘆きは、アメリカの読者の不評を買うこととなったが、アメリカ小説の未来を追求し、それを世に伝える使命感を優先

した当然の結果とも言える。その強い決意が、『ホーソン論』の中で、時には差別的とも受け取られる「地方的」という表現を繰り返させてしまったのではないだろうか。

ホーソンが没した 1864 年は、ジェイムズの作家活動の基礎が築かれてゆく時期でもあり、またアメリカの社会状況にも、大きな変化が生じた頃である。19 世紀後半のアメリカは、1865 年の南北戦争終焉を一つの大きなきっかけとして、金融制度や鉄道網の拡大と整備を背景に、資本主義経済が成熟してゆく段階に入った時代とされる。すなわち、「南北戦争と再建のなかで二つの革命を経験したアメリカが、かつてのような西欧世界の辺境に位置する農業的の社会から、工業や都市を特徴にする社会へと爆発的に変貌し、世界の舞台へおどりだした時期だった」(209-10)¹⁰のである。

このようなアメリカ社会における過渡期に、作家ジェイムズの黎明期とホーソンの死が交差したのであり、ジェイムズにとってホーソンは、南北戦争を一つの区切りとした一つ前の時代を象徴する作家であったと言える。ジェイムズはアメリカの社会産業構造の変化を目の当たりにしながら、一つ前の時代の先駆者であるホーソンを手本にしつつ、ジェイムズ独自の小説のあり方を模索していったのに違いない。

このような社会構造の変化は、経済的に豊かになり娯楽や余暇を楽しむ中産階級の人口を増大させた。それに伴い、かつては一部のエリート層に限られていた文藝の楽しみが、より幅の広い志向をもつ一般大衆に拡大していくことになる。ホーソンの生誕地であり、ピューリタニズムの精神が根付いているニューイングランドの文化圏には、イギリスの貴族文化を手本とみなす一種のエリート意識が根底にあった。一方、ジェイムズはボストンで暮らしたことはあっても、アメリカ経済の中心地に発展してゆくニューヨークの生まれであり、アメリカの物質主義的傾向をより身近に感じていたはずである。またジェイムズの目指す文学形式には、大衆には理解されにくい芸術志向があった反面、高級路線を追求するだけでは職業作家として立ち行かない状況にも直面した。このような背景がジェイムズにはあり、そのため『ホーソン論』においては、利益の追求や物質的な繁栄といった価値観が重んじられる風潮に直面した際に、それを嘆く作家の姿となって現れている。

He [Hawthorne] was poor, he was solitary, and he undertook to devote himself to literature in a community in which the interest in literature was as yet of the smallest. It is not too much to say that even to the present day it is a considerable discomfort in the United States not to be "in business." The young man who attempts to launch himself in a career that does not belong to the so-called practical order; the young man who has not, in a word, an office in the business quarter of the town, with his name painted on the door, has but a

limited place in the social system, finds no particular bough to perch upon. (342)

ジェイムズがこの中で言及する「若者」は、若きホーソンを指していると思われるが、ホーソンが作家として生きていくうえで感じていたと思われる困難は、そのままジェイムズ自身の姿に重ねられているのではないだろうか。ジェイムズは、表向きは文化的成熟度の低いアメリカ社会で文筆業に携わるホーソンを同情してはいる。しかしそのようなアメリカ社会を嘆く様子は、ジェイムズ自身の不満の表明に他ならず、ホーソンが生きた時代における作家の苦勞を、ホーソンに同情を寄せる形をとりながらも、その社会的な肩身の狭さを、我が身に引き寄せて嘆くことで、彼自身の欲求を果たそうとしているように見えるからである。つまり、ジェイムズの不満や嘆きは、アメリカ小説の地位を向上させたいというジェイムズの願望から発したものだと考えられるのである。そしてその願望を成就させるためには、フランスやイギリスの小説作法に倣ってそれらを取り入れるだけでは十分でないことを、『ホーソン論』を執筆する過程でジェイムズははっきり認識していたに違いない。

結局、物質主義が優先されるアメリカ社会の時代の流れに身を置きながら、一方で非生産的な活動である作家業を継続し、さらにそこから質の高い文学を広く浸透させたいとするジレンマが、ジェイムズにはあったのである。そしてそのジレンマを解消するには、ヨーロッパ文学とは異なるアメリカ独自の小説世界を確立してゆく必要がある。そうするとジェイムズの目指す小説の水準は自ずと高くなるのであり、『ホーソン論』においてはそのようなジェイムズの理想とする小説論の展開が如実に窺える。だからこそ、ホーソンの描く、アメリカ独自の資質が見事に表現された小説を礼賛する一方で、そこに留まるだけではなく、超えなくてはならない資質として、時には批判を伴ってしまうという揺らぎが生じてしまったのだろう。

2. 地方性への賛否両論から窺えるジェイムズのリアリズム志向

ジェイムズが自ら選んだ国際的立場は、アメリカ小説の新しい方向性を作ってゆく上で多用な題材を提供できる機会を彼にもたらしたであろうし、その経験そのものが彼の強みとなったであろう。しかし国際的な立場に身を置くジェイムズは、ホーソンが備えていたようなアメリカの土着性、すなわちその地方独自の魅力を伝える「地方性」を同時に持つことはできなかった。そのようなジェイムズであったからこそ、とりわけホーソンの『七破風の家』(*The House of Seven Gables*)における、セイレムの魅力を伝えるホーソンの筆力が、魅力的に映ったようである。ジェイムズは、セイレム

の風景描写の中に、過ぎ去りし日のニューイングランドの光景が確かに再現されているところに着目している。ジェイムズから見れば、そのような描写は、セイレムに先祖代々暮らしてきたホーソーンであったからこそなした彼独自の際立った才能なのであり、十分評価に値する。『七破風の家』における、ニューイングランド旧家の保守的な人物や、静かな夏の木陰を思わせる町の情景は、ジェイムズの暮らしたパリやロンドン、ローマのような伝統的な都市が持つ洗練された魅力とは異なっていたであろう。しかし、アメリカの地方都市において、同国人が誇ることのできる美的要素として、ジェイムズに訴えかけたと思われる。ある一つの地域に定住することによって描くことのできる、その地域の魅力を余すところなく伝える作家の姿勢とは異なる背景を持つジェイムズにとっては、ホーソーンの描く一地方の慎ましくも豊かな光景が、ことさら地方の魅力と香りを伝える文章だと映ったに違いない。

ジェイムズは、とりわけホーソーンの生まれ育ったセイレムの風土が、小説に与える影響を重要視している。またそれ故に、ジェイムズは、ホーソーンがセイレムのような豊かな土壌で育ったにも関わらず、かえってそれが当然のこととして、作品に十分にその魅力を反映させる機会を逃していると嘆いている。

Still, since a beautiful writer was growing up in Salem, it is a pity that he should not have given himself a chance to commemorate some of the types that flourished in the richest soil of the place. (354)

ジェイムズのこのような嘆きの中にこそ、セイレムを、故国アメリカの一部というよりも、外国の土地であるかのように眺めてしまうジェイムズの国際的立場が、明確に現れている。すなわち、ヨーロッパという異国の風土が持つ魅力を、外部者の立場から鑑賞することに慣れているジェイムズであったからこそ、ホーソーンやアメリカの地方性がたたえる豊かさを、アメリカならではの魅力ある風景として高く評価できたのである。そしてこのアメリカの一地方が持つ独自の魅力を、その土地に馴染み深い者として伝えることも、作家の重要な使命の一つであると、ジェイムズは主張するのである。同様に、ジェイムズは、ホーソーンが一時期滞在したブルック・ファーム (Brook Farm) で送った素朴な生活にも牧歌的な情緒を見出してはいるが、ここでの禁欲主義的な若い男女の生活と、社会主義的運動に、強く共感を覚えたわけではなかったようだ。ジェイムズにとって、ブルック・ファームは、過去の歴史に埋もれてしまった遠い出来事であり、それゆえに、素朴で牧歌的な風景の一部として、一種の理想郷に昇華しているかのようである。そしてジェイムズは、ジェイムズは、ホーソーンがブルック・ファームで体験したような「自然で平凡な事物」(388)の中にこそ、素朴を好むホーソーン

の気質があり、それがホーソーンの性格を表しているとみならず。そしてホーソーンの好みは自然の事物に向けられているところに、彼の地方性を見出し、それをホーソーンならではの特質だとして尊重しつつも、ジェイムズ自身はあくまでも、フランスやイギリスに見られる伝統性や、洗練された文化と小説が生み出される豊かな歴史的背景の方に、目を向けようとしていた。自然に親しむホーソーンと一線を画するこの姿勢は、『ホーソーン論』においてとりわけ有名な一説である、アメリカの生活にないものの羅列の中によく窺える。

No State, in the European sense of the word, and indeed barely a specific national name. No sovereign, no court, no personal loyalty, no aristocracy, no church, no clergy, no army, no diplomatic service, no country gentlemen, no palaces, no castles, nor manors, nor old country-houses, nor parsonages, nor thatched cottages, nor ivied ruins; no cathedrals, nor abbeys, nor little Norman churches; no great Universities nor public schools—no Oxford, nor Eton, nor Harrow; no literature, no novels, no museums, no pictures, no political society, no sporting class—no Epsom nor Ascot! (351-52)

「君主もいない、宮廷もない、個人の忠誠もない、貴族制度もない…」から始まる 30 以上のない物尽くしのリストは、それだけジェイムズが、アメリカの地方性に限界を感じていることを示している。そしてここに挙げられているものは、ジェイムズにとって、ヨーロッパを象徴するものであり、彼が実際に見てきたものであるだろうが、一般的なアメリカ人たちにとっては、馴染みの薄いものばかりであるに違いない。そのことが、ますますアメリカ批評界の不評を買ったともいえるだろう。ここに挙げられている項目は、そのほとんどが裕福なヨーロッパ暮らしが可能な、ジェイムズ一家のような特殊な家庭の者たちだけが経験できるものだからである。そのためジェイムズが小説の題材として注目するのは、イギリスやフランスの洗練された文化や芸術美を基準とした一種の理想郷であり、現実のアメリカ社会の状況とは相容れないものであるという印象を、批評界に与えたに違いない。

確かにジェイムズは、アメリカの地方性が象徴する自然美よりも、ヨーロッパ文化が生み出した洗練された人工物を崇拝していたのである。そのことは、ジェイムズがホーソーンの時代のアメリカにおける風潮を、ヨーロッパの洗練された文化とは程遠いものとしてとらえている記述にも、垣間見ることが出来る。

In the United States, in those days, there were no great things to look out at (save forests and rivers); life was not in the least spectacular;

society was not brilliant; the country was given up to a great material prosperity, a homely bourgeois activity, a diffusion of primary education and the common luxuries. There was therefore, among the cultivated classes, much relish for the utterances of a writer who would help one to take a picturesque view of one's internal possibilities, and to find in the landscape of the soul all sorts of fine sunrise and moonlight effects. (383)

ここでジェイムズは、アメリカが物質的繁栄や一般大衆の好みを追及する余り、殺伐とした暮らしになってしまったホーソンの当時の風潮を嘆いている。さらに、そのような風潮が、「知識階級」にとって好ましくないものであったとし、彼らにふさわしい精神的充足を与えることができるのは、作家という職業にある者だと述べている。つまりジェイムズは、一般大衆と知識階級をはっきり分けて、作家の仕事は、一般大衆に迎合するのではなく、より芸術的な方向に向かうべきだと発言しているも同様である。このように、アメリカ社会にヨーロッパの階級性を持ち込んだかのようなジェイムズの考えは、「当事の合衆国では(森林や河川をのぞけば)目にすべき偉大なものは存在しなかった」といったジェイムズのアメリカ観と相まって、一般大衆の反感を買う可能性を大いに持っている。しかしジェイムズは、アメリカのそのような社会状況をただ嘆くだけではなく、アメリカの状況を正しくふまえたうえで、作家として進むべき道を、『ホーソン論』で展開しようとしているのである。そのためジェイムズは、ホーソン作品における地方性の再現が、アメリカの一地方の魅力を伝えるだけで終わってしまう可能性を危惧するという形でもって、進むべき道を示そうとしている。ジェイムズにとって、ホーソンが描いたセイレムの地方性は、優れた小説の背景でありながらも、それだけでは地方限定に留まる危うさを秘めたものだと思っただけであろう。アメリカの文筆業の地位を高めることを目標にし、ヨーロッパ文化を基準とするジェイムズから見れば、ホーソン作品のように、アメリカの一地方を描写するだけでは十分ではなかったに違いない。

しかし、ジェイムズは決してヨーロッパの文化を模倣し、それに追従することのみを是としているわけではない。彼が求めたリアリズムの性格から考えると、アメリカの地方性の描写も重要視しつつ、さらにそれをリアリズムによって再現する可能性を追っていたことは容易に想像できる。そしてジェイムズは、そのようなリアリズムを追求することで、アメリカ独自の小説を興隆し、アメリカの文化水準を高めてゆくことを望んでいたのではないだろうか。

ところでジェイムズの目指すリアリズムは、批評家フィリップ・バリッシュ(Phillip Barrish)が、現実を伝えるものというより、「現実の印象を伝えるもの」であり、それがジェイムズの考える「芸術」や「想像力」、「スタイル、メソ

ッド、フォーム」と一体化するという特徴を持つもの(292)¹¹だと考えられる。小説が現実の印象をより鮮明に伝えるには、それにふさわしい洗練された形式が不可欠であり、そのような小説こそが芸術作品になりうると、ジェイムズは考えているのではないだろうか。またそうであるからこそ、ホーソンが「リアリストではなかった」(412)ことや、彼がフランス小説のような「文学理論を持たなかった」(321)ことが、とりわけ残念に思われるのであろう。

実際ジェイムズは、『緋文字』(*The Scarlet Letter*)の欠点を、「現実感の欠如と空想的要素の乱用」(404)にあると指摘し、ホーソン作品にリアリズムの視点がどれだけ存在するのかを冷静に分析している。そしてジェイムズは、ホーソンが「象徴主義」(407)を多用しすぎた結果、『緋文字』の「道徳的悲劇」が、「物理的喜劇」(408)になってしまっていることを、非常に残念がるのである。例えば、ジェイムズは、ヘスター・プリン(Hester Prynne)とアーサー・ディムズデイル(Arthur Dimmesdale)の苦悩の中に、ピューリタニズム道徳の真髓が見られることを高く評価するのだが、彼らのせつかくの悲劇的要素が、象徴主義の乱用とリアリズムの欠如により損なわれてしまっていると嘆いている。

ジェイムズはさらに、リアリズムの視点からホーソンの人物描写を分析している。すなわち、「類型」(417)をなぞっただけの人物ではなく、人物の性格がリアルに描かれているかどうかである。その結果、ジェイムズは『七破風の家』のヘプシバー・ピンチョン(Hepzibah Pyncheon)が実際の人間というよりも、「絵」(414)のようであるとし、低い評価しか与えていない。その一方でジェイムズは、ピンチョン判事(Judge Pyncheon)のありありとした人物描写を高く評価している。

Judge Pyncheon is an elaborate piece of description, made up of a hundred admirable touches, in which satire is always winged with fancy, and fancy is linked with a deep sense of reality. It is difficult to say whether Hawthorne followed a model in describing Judge Pyncheon; but it is tolerably obvious that the picture is an impression—a copious impression—of an individual. (416)

ジェイムズは、ピンチョン判事の人物描写の中に、彼特有の性格や心の動きが反映されており、それ故にピンチョン判事の姿が、ただそこに存在する絵としてではなく、実人生において生活しているかのような印象を与えるために、彼が「一人の個人」として存在するかのようだと認めている。そのようなホーソンの描写がもたらす「強い現実味」にこそ、ジェイムズはリアリズムの兆しを見出しているのである。

結局、ジェイムズが目指していたのは、アメリカ独自の優れた道徳的テーマを、知的なリアリズムの文学論に従って再現することだったのではないだろうか。だからこそジェイム

ズは、そのような兆しを、「強い現実味」を持つピンチョン判事のような人物に見出したに違いない。そしてヨーロッパの文学論を用いながらも、アメリカ的な道徳的テーマを軸に据えることで、ジェイムズは、ヨーロッパの模倣には終わらない、アメリカ独自のリアリズムや、アメリカならではの文学世界を求めたのであろう。『ホーソン論』は、そのようなジェイムズ自身の文学姿勢を顕著に表しているからこそ、ラズロップによる「ホーソン伝」のような伝記を超え、批評論の性質が、より強く前面に出てきたと言える。

3. ピューリタニズムの表現方法に見出す小説の未来

ジェイムズのリアリズム志向は、ホーソンの人物描写だけでなく、ピューリタニズムの表現方法への評価にも見出せる。ジェイムズは、国際的視野からホーソンの地方性をとらえるが故に、地方文学で終わりがねないホーソンの限界を指摘する。しかし、ホーソンの地方性と結びつくピューリタニズムの扱いについては、ジェイムズが考えるようなリアリズムの理想を反映させていると、高く評価している。

Puritanism, in a word, is there, not only objectively, as Hawthorne tried to place it there, but subjectively as well. Not, I mean, in his judgment of his characters, in any harshness of prejudice, or in the obtrusion of a moral lesson; but in the very quality of his own vision, in the tone of the picture, in a certain coldness and exclusiveness of treatment. (404)

ジェイムズは、ホーソンのピューリタニズムが彼にとって馴染み深い土壌と、祖先からの伝統に裏づけされた地方性という「客観性」に基づくだけでなく、彼の優れた「空想力」を駆使した「主観性」を加えて描かれている点に着目する(403)。先祖代々セイレムを本拠地とし、厳格なピューリタンたちを祖先に持つホーソンは、ピューリタニズムをただ単に描写するのでも、教訓めいた調子によって伝えるのでもなく、セイレムに生まれ育ったホーソンの実体験をもとに、空想世界において発展させ、それによって独自の文学世界を築き上げている。それ故に、『緋文字』におけるピューリタンたちの生活風景も、より生き生きとしたホーソンの空想の特質そのものを表していると、ジェイムズは考える。このようなホーソンの空想力に対する賛美は、先ほど述べた『緋文字』における「現実感の欠如と空想的要素の乱用」(404)で、ジェイムズが批判する空想とは分けて考える必要があるだろう。ジェイムズは、ホーソン作品にリアリズムの兆しを見出そうとするが、その際に、ホーソンの空

想力が有功に発揮されている例として、ピューリタンたちの生活風景に着目したのである。そしてその描写の中に、客観性と主観性が融合していることを認め、さらにその相互作用によって、ホーソン作品の地方性が抱える限界という欠点を超える可能性を見出している。

ホーソンの描くピューリタニズムを、このように積極的に評価するジェイムズの姿勢は、晩年作『大理石の牧神』(*The Marble Faun*)に対する批判の中にも見出せる。この作品は、ホーソンがリヴァプール領事の職を辞任した後に赴いたイタリアでの二年間の経験が下敷きになっており、素朴で陽気なイタリアの青年であるドナテロ(Donatello)が、罪を犯すことによって自己認識を強めてゆく過程を描いたロマンスである。ドナテロは、ローマのカピトリノ博物館の彫刻展示室にあるプラクシテレス(Praciteles)の大理石牧神像と類似した人物として登場する。またミリアム(Miriam)とヒルダ(Hilda)は、ともにローマで絵画の勉強をしている女性たちであり、さらにもう一人の主要人物であるケニヨン(Kenyon)が、彫刻家を目指す若者となっている。これらの登場人物たちが、芸術家であったり、芸術と関係深い人物であったりするところに、ホーソンのイタリア体験が如実に反映されている。さらにホーソンは、イタリア滞在中に、ベアトリーチェ・チェンチ(Beatrice Cenci)の肖像画と彼女にまつわる逸話に魅了され、ミリアムとヒルダのベアトリーチェに対する価値観の違いを通じて、罪の問題を深く掘り下げている。ガイド・レニ(Guido Reni)の描いたベアトリーチェの肖像画のモデルは、父親殺害の罪で処刑された女性であり、多くの芸術家たちが、彼女は近親相姦の被害者であり無実だとみなす、悲劇のヒロインである。ホーソンは、このベアトリーチェの罪に興味を抱き、『大理石の牧神』の主題の下敷きとしている。ローマを舞台とした『大理石の牧神』は、ホーソンがイタリアにおいて訪れた数々の名所や、鑑賞した芸術作品からヒントを得て創作されたのである。そのためジェイムズは、『大理石の牧神』の手法やテーマについてだけでなく、ホーソンのイタリア体験がもたらしたイタリア観をも、批評の対象としている。たとえば、『大理石の牧神』の背景描写にヒントをもたらしたホーソンのイタリア滞在記である『イタリアン・ノートブックス』について、ジェイムズは次のように述べている。

His *Italian Note-Books* are very pleasant reading, but they are of less interest than the others, for his contact with the life of the country, its people and its manners, was simply that of the ordinary tourist—which amounts to saying that it was extremely superficial. (439)

ジェイムズは、『イタリアン・ノートブックス』に記述されたイタリアの記述が「ありきたりの観光客のもの」であるとか、「極めて表面的」だと指摘する。ジェイムズは、ホー

ーンが人生の晩年になって海外生活を経験したことをあまり考慮せず、作家としてももう少し込み入った関わり方をすべきだと考えていることがわかる。ホーソーンがイタリアの表面しか見ていなかったとするジェイムズの考え方は、ホーソーンが、裸体像を見た際の感想についても向けられている。

The plastic sense was not strong in Hawthorne; there can be no better proof of it than his curious aversion to the representation of the nude in sculpture. This aversion was deep-seated; he constantly returns to it, exclaiming upon the incongruity of modern artists making naked figures. He apparently quite failed to see that nudity is not an incident, or accident, of sculpture, but its very essence and principle; and his jealousy of undressed images strikes the reader as a strange, vague, long-dormant heritage of his straight-laced Puritan ancestry. Whenever he talks of statues he makes a great point of the smoothness and whiteness of the marble—speaks of the surface of the marble as if it were half the beauty of the image... (441)

ジェイムズは、ホーソーンが裸体像を嫌悪していることに対して、それは彼の鑑賞眼が未熟であるためだと考えている。さらにジェイムズは、ホーソーンが裸体像を鑑賞する際、その「大理石の滑らかさや白さ」にばかり注目しており、裸体像がもつ美の本質を理解しない鑑賞の仕方が、素人的であると批判している。つまりホーソーンにとって裸体像は淫らなものであり、その曲線美を楽しむことは禁欲主義に反する、というピューリタニズム的な偏見に満ちたものだとジェイムズは否定的にとらえているのである。そこには、裸体像の解釈をめぐる、ジェイムズ自身の鑑識眼に対する自信が見え隠れしている。表向きにははっきりと書いていないが、ジェイムズは、ホーソーンのように裸体像を嫌悪する鑑賞の仕方が、無知から来るものだとけなしているのである。このような記述にも、ホーソーン作品を「地方的」と繰り返し述べて、田舎物だと馬鹿にするような傾向が窺える。

幼少期から多くのヨーロッパ芸術作品に触れてきたジェイムズからすると、『大理石の牧神』は、このような未熟な鑑賞姿勢に基づいて描かれている点が目に付くため、いっそう物足りなさを覚えるのであり、それが次のような批評につながっている。

It [*The Marble Faun*] has a great beauty, of interest and grace; but it has to my sense a slighter value than its companions, and I am far from regarding it as the masterpiece of the author, a position to which we sometimes hear it assigned. The subject is admirable, and so are many of the details; but the

whole thing is less simple and complete than either of the three tales of American life, and Hawthorne forfeited a precious advantage in ceasing to tread his native soil. Half the virtue of *The Scarlet Letter* and *The House of the Seven Gables* is in their local quality; they are impregnated with the New England air. (444)

ジェイムズは、アメリカを舞台としたホーソーンのこれまでの作品と比較すると、『大理石の牧神』が劣っていると述べている。そしてホーソーンの才能が、地方性にあふれた描写をする時にこそ最大限に発揮されることを、ここでははっきりと断言している。ジェイムズは、そのようなホーソーンの特質を、アメリカ作家ならではの才能だとみなし、アメリカを舞台とした『緋文字』や『七破風の家』が優れているのは、その地方性にあると認めている。ローマを舞台にした『大理石の牧神』が、その風土を伝えるという意味では、観光客の視点を超えていないとするジェイムズの批判は厳しいものであるが、そのような批評こそが、ジェイムズならではの視点に基づいたものなのである。

ジェイムズのこのような厳しい批判の目は、作品の背景の扱い方だけでなく、手法についても及んでいるが、その批判は、ジェイムズが『緋文字』で指摘した、ホーソーンの過剰な想像力に向けられている。もちろん、『緋文字』であれ『大理石の牧神』であれ、ホーソーンの想像力が優れた小説の創作に不可欠な役割を果たしている点は、ジェイムズと認めている。しかしジェイムズは、両作品において、せつかくのホーソーンの想像力が、適度に発揮されるのではなく、現実感を欠如させる程に夥しいものになっていると、批判しているのである。フランス小説に見られるようなリアリズム手法を目指していたジェイムズは、ホーソーンのように空想に重きを置いた手法をそのまま受け入れることは難しく、むしろ小説の価値を損なうものだとみなしていたに違いない。

もっともジェイムズは、『大理石の牧神』において、ピューリタニズムを体現する人物を、単なる「絵」ではなく、性格の動きから描写しているとして、『緋文字』と同等かそれ以上に評価している。『大理石の牧神』は、主人公ドナテロやミリアムの殺人という出来事を中心とする作品であり、友人である彼らの罪を目撃し、それに煩悶するヒルダは、ドナテロやミリアムと並ぶ重要人物であっても、副主人公的な存在だと言える。しかしジェイムズは、ドナテロとミリアムの犯す罪と、その罪意識よりも、彼らの犯罪を目撃して苦悩するヒルダの方に、より深い関心を寄せる。とうのも、ヒルダは罪を目撃しただけで、直接罪を犯したわけではないにも関わらず、罪意識にとらわれ、そうした彼女の心の弱さと、それをピューリタニズムの信仰を貫くことで克服しようとする強い姿勢がもたらす、アメリカ人ならではの内面の葛藤に、ジェイムズはリアリズムの兆しを見出すからである。

The character of Hilda has always struck me as an admirable invention.... She has done no wrong, and yet wrong-doing has become a part of her experience, and she carries the weight of her detested knowledge upon her heart.... She has passed the whole lonely summer in Rome, and one day, at the end of it, finding herself in St. Peter's, she enters a confessional, strenuous daughter of the Puritans as she is, and pours out her dark knowledge into the bosom of the Church—then comes away with her conscience lightened, not a whit the less a Puritan than before. (446)

ヒルダは、殺人の目撃者となってしまったことで心理的な重圧を抱え、ローマの告解室で罪を告白することにより、罪の意識から解放される。しかし本来厳格なピューリタンであるヒルダは、告白後も「ピューリタンのままでいる」ことに変わりはない。ジェイムズは、ヒルダが罪の意識に苦しみ、それを解放させる過程において、ピューリタンの姿勢を貫いていたところに、ホーソーンのピューリタニズム描写の真髓を見出している。つまりジェイムズは、ホーソーンがセイレムに代々暮らしてきたアメリカ作家であるからこそ到達できたリアリズムが、ヒルダの姿勢の中に表現されていると考えているのである。

しかし、ジェイムズがこのようにホーソーンの才能を認めながらも、彼が評価の対象として着目するのは、主人公たちの起こす事件から一定の距離を保ち、観察する立場にとどまる副主人公のヒルダという、ジェイムズの小説観にかなった人物である。そのことは、ジェイムズが、ホーソーンが本来持っている描き方を批評することよりも、むしろジェイムズ自身の著作姿勢や理念を表明することの方にこだわっていることを意味する。実際、ここでホーソーンのリアリズムとして高く評価されている手法は、アメリカから距離を置き、アメリカ作家ならではの美点を客観的にとらえることのできたジェイムズだからこそ見えたものである。そしてそれはまた、ジェイムズ自身の小説に見出せる、リアリズムの特徴に他ならない。ジェイムズはヒルダを通して描かれた、罪の重圧への苦悩と、ピューリタニズムの信仰による罪への対処の仕方を評価することで、彼自身が目指そうとした小説の方向性、すなわちリアリズムにより道徳意識を伝える重要性を表そうとしていたのである。

結び

ジェイムズは『ホーソーン論』において、ホーソーンの地方性の限界と、その地方性がもたらすアメリカ的特質の優位

性の、両方を見ている。そして、その両者がせめぎあう不安定な関係は、ジェイムズ自身の国際的立場がもたらす強みと、確固たる足場をもたない不安定さから来る弱みにも、通じていたに違いない。ジェイムズは、アメリカ社会やアメリカ人のあり方を国際的立場から眺めるように、観察の対象から一步距離を置いて、物事を外側から眺めることのできる独自の立場を彼自身の強みだととらえ、それを小説に取り込もうとした。その一方で、ホーソーンのようにセイレムという一地方に先祖代々根ざしているからこそ持つことのできる、アメリカ作家の特質を欠いているという不安定感もまた、意識していたのではないだろうか。そして、ジェイムズとは異なる方法で、アメリカ人としての拠り所を生得しているかのようなホーソーンについて、彼のアメリカ的性格を高く評価しつつも、客観的な態度で劣点を指摘している。ジェイムズはそうした揺らぎを体感する中で、テーマや小説技法を研鑽し、アメリカ人としての道徳的葛藤をいかに小説で描くのかを追及し、ホーソーンとは異なる新しいアメリカ小説の方向性を模索していたように見える。

ジェイムズは、ホーソーンを「地方的」だととらえるだけでなく、彼が「未経験」(430)であるとも指摘している。だがホーソーンは、作家活動だけでなく、税関の職員やリヴァプール領事の仕事などの実務に携わっている。またブルック・ファームに滞在したり、大学時代の友人であったピアスの大統領選挙のために、宣伝用の文を書いたりするなど、社会的にも政治的にも活動の幅を持っていた。これらのホーソーンの経験を、ジェイムズは『ホーソーン論』で細やかに記述しながら、それでもホーソーンを「未経験」だと述べている。従って、ジェイムズが考える「経験」は、職業経験や社会経験の幅を指すのではないことは明らかである。ジェイムズが、作家に必要な経験とみなすのは、彼自身が行ってきたような、場所から場所への移動であり、異国の地で生活することを通して得られる見聞を自らの作品に反映させることではないだろうか。すなわち、国際的立場を持つことでより深く小説のテーマを掘り下げ、海外小説からその手法を学ぶといった「経験」を指していたのではないだろうか。ジェイムズにとっては、一地方に留まることなく常に居場所を変えることが常であり、そのような生活様式が、ジェイムズに物事を一步離れて観察する、外部者の冷静な立場をもたらした。しかしそのような立場は、セイレムに根ざした作家であるホーソーンには馴染みの薄いものである。ホーソーンの「地方性」が彼の作家としての限界につながりかねないと認識していたからこそ、ジェイムズは彼自身が得ることのできた国際的立場がもたらす「経験」の必要性を、作家として発展していくために必要な条件として、強く意識していたに違いない。

ところでジェイムズは、『ホーソーン論』を書くにあたり、ホーソーン作品や彼の『イタリアン・ノートブックス』への言及だけでなく、ホーソーンの伝記をしたためたラズロップ氏の仕事や、文筆業に携わる人々についての言及を数多くしている。文筆業に携わる人々とその作品へと広く目配りする

のは、ジェイムズが書く行為を真剣にとらえており、常にその重要性を伝えたいと考えていたことを表している。言い換えるなら、ジェイムズは『ホーソン論』を通じて批評家の立場を確立しつつ、職業としての文筆業のあり方や、文化的に未熟なアメリカ社会における小説の発展を、さらに広範囲な観点からとらえようとしていたことが窺えるのである。

文筆業に向けるジェイムズのまなざしは、産業主義、物質主義が優先されるアメリカ社会への一つの抵抗の形でもあるだろう。ホーソンとほぼ同時代を生きたフランスの知識人アレクシ・ド・トクヴィル (Alexis de Tocqueville) は、その著書『アメリカのデモクラシー』 (*De la Démocratie en Amérique*, 1835, 40) の中で、アメリカ人が商業主義に傾きやすいことを指摘している (207)¹²。トクヴィルは政治家の立場からアメリカ人を眺めているが、商業に対するアメリカ人の情熱は政治の世界にも持ち込まれるほど強いものだという主張は興味深い。またトクヴィルは、商売の繁栄によってもたらされた「巨富」をアメリカ人がどのように使うのかにも言及している。トクヴィルは、積み上げることで満足し、その使い方にまで力が及ばないのがアメリカ人の特質であるかのように述べているが、ジェイムズの小説の人物たちを見てみても、この傾向は確かにある。

資本主義産業の急速な発展に伴い、物質的な利益を追求する経済活動が優先される風潮が強かった 19 世紀後半のアメリカ社会において、作家の地位を確立してゆくことは困難なことだったに違いない。拡大や進歩を推し進めることに躍起になっていたアメリカ社会における文筆業は、大規模農業や鉄鋼業といった、目に見える経済効果を産み出す活動とは異なる非生産的なものである。そのような状況の中、ジェイムズは、ホーソンの小説作法を手本としながら、ホーソンの時代とは異なる小説芸術を昇華させてゆくことを、自らの使命とした。そしてジェイムズのそのような野望が、アメリカ社会における作家の地位を上げることにつながるよう、日々執筆活動を行っていたに違いない。しかしアメリカ社会の状況や、自らの作家としての未成熟さなどが相まって、なかなか思うように行かない歯がゆさが、かつてホーソンも経験したと思われる葛藤に、同じアメリカ人としての共感する姿勢と、ホーソンに足らなかった点が、どうしても目に付いてしまうという国際的立場からの観点により、『ホーソン論』での揺らぎを生じさせているのだろう。

その揺らぎは、一方では非文化的な土壌で作家活動を行うことのできたホーソンへの尊敬の念となって表れ、また一方では、セイレムに深く根ざすがゆえに、地方限定で広がりを持たないままの世界で閉じてしまったことを惜しむ気持ちからくる、ホーソン作品への批判という形で表出してい

る。また、一地域に根ざしているが故に、深く狭い地方性をもたらす体験が、アメリカならではのピューリタニズムという道徳性と結びついて、アメリカ独自のリアリズムを生み出している点を評価しながらも、変化にさらされているアメリカの状況を客観視するだけの国際的視野のなさを批判するという形でも、表されている。『ホーソン論』における賛否両論の繰り返しは、当時のアメリカにおける小説芸術の地位の低さという現実と、それに立ち向かいたいとするジェイムズの作家的野望の強さとの間の葛藤の縮図であり、国際的足場という彼の強みとその繰り返しにさらなる拍車をかけていたと言える。

引用文献

- 1 Henry James. "Notes of a Son and Brothers." *Henry James: Autobiography*, 239-544. Ed. Frederick W. Dupee. New York: Criterion, 1956.
- 2 Henry James. "Hawthorne." *Henry James Literary Criticism Vol. 1: Essays on Literature, American Writers, English Writers*. Ed. Leon Edel. New York: Library of America, 1984. 319-457.
※以下、この作品からの引用はすべて、引用箇所末尾のカッコ内にそのページ数を示す。
- 3 Peter Buitenhuis. "Henry James on Hawthorne." *New England Quarterly* 32 (1959): 207-25.
- 4 Dan McCall. *Citizens of Somewhere Else: Nathaniel Hawthorne and Henry James*. Ithaca: Cornell UP, 1999.
- 5 MacCall, 211.
- 6 Michael Anesko. "Is James's Hawthorne Really James's Hawthorne?" *Henry James Review* 29 (2008): 36-53.
- 7 Philip Grover. *Henry James and the French Novel: A Study in Inspiration*. London: Elek, 1973.
- 8 Priscilla L. Walton. "Victorian England (1870-1890)." *Henry James in Context*. Ed. David McWhirter. Cambridge: Cambridge UP, 2010. 26-36.
- 9 Walton, 29.
- 10 横山良 「爆発的工業化と激動の世紀末」 『アメリカ史』 山川出版社 2004年 209-242頁
- 11 Phillip Barrish. "Realism and naturalism." *Henry James in Context*. Ed. David McWhirter. Cambridge: Cambridge UP, 2010. 292-300.
- 12 アレクシ・ド・トクヴィル 『アメリカのデモクラシー』 第一巻 (下) 松本礼二訳 岩波文庫 2005年